

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2013 年
No. 28

2013年7月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2013 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

東京性教育研修セミナー2013報告…………… 1
性教育の歴史を尋ねる④…………… 7
北丸雄二のニューヨークレポート②⑧…………… 8

「ありのままのわたしを生きる」ために②⑧…………… 9
今月のブックガイド…………… 10
JASEインフォメーション…………… 11

■東京性教育研修セミナー 2013 報告

青少年の性行動の日常化と分極化

——「第7回青少年の性行動全国調査」からみえてくるもの——

2013年3月20日(水・祝日)、文京区の文京シビックセンター26階スカイホールで、「第7回青少年の性行動全国調査」の分析報告セミナーが開催された。調査委員会のメンバー5名の講演・報告とディスカッション・Q & Aが行われた。本紙では、中澤智恵氏の報告「性教育・性情報源と性知識——性知識の伝達という観点から——」の要旨を中心に紹介する。

2005年以来6年ぶりの調査に注目が集まり、新聞マスコミの取材も多く、熱気のこもったセミナーとなった。スカイホールの定員をオーバーする参加者を集めセミナーは始まった。その概要を報告する。

13時10分より、片瀬一男東北学院大学教養学部教授が「性行動調査の意義と今後の課題」と題した基調講演を行い、その後、それぞれの専門分野からの分析結果が報告された。



基調講演
(片瀬一男東北学院大学教授)

高橋征仁山口大学人文学部教授が「欲望の時代からリスクの時代へ——性の自己決定をめぐるパラドクス——」、石川由香里活水女子大学健康生活学部教授が「青少年の家庭環境と性行動——家族危機は青少年の性行動を促進するのか——」と題して分析報告を行った。10分間のコーヒー・ブレイクをはさんで、15時20分から、渡辺裕子駿河台大学経済学部教授が「消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識」、続いて中澤智恵東京学芸大学教育学部准教授が「性教育・性情報源と性知識——性知識の伝達という観点から——」をテーマに報告を行った。その後、講師5名と「若者の性行動は今後どう変化していくのか?」をテーマに活発なディスカッションが交わされた。

ここでは、学校の性教育を進めるに当たって興味深いテーマである中澤智恵氏の報告の要旨を紹介する。

性教育・性情報源と性知識

——性知識の伝達という観点から——

現在の青少年、中学生、高校生、大学生が、どのような性情報のリソース（情報源）に接しているのか、現状を少し細かく報告したいと思います。今回の調査では、一つは避妊に関する情報、もう一つはセックス、性交に関して、どこから情報を得ているか、としてとられました。

性交に関する情報源

性交に関する情報源としては、中学生、高校生、大学生のいずれも「友人・先輩」を情報源とするという人が多く、続いて、「学校」「インターネット」「マンガ」と続いていきます。図表1、2は、高校生の調査結果です。性交の情報源は、中学校から大学生まで、いずれの学校段階でも、「友人・先輩」が最も多く、それに続くのが、「学校」「インターネット」「マンガ」です。前回2005年調査と比較すると、男子では「ポルノ雑誌」「アダルトビデオ」が、女子では「付き合っている人」や「マンガ」「一般雑誌」の比率が下がっています。

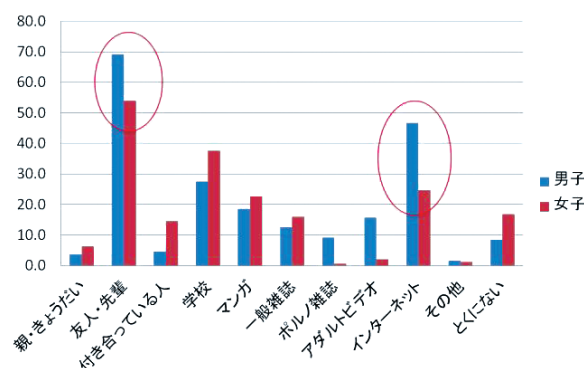
ポルノ雑誌やマンガといったマスメディアに代わって、インターネットの利用が高くなっています。大学生では、中・高校生に比べて情報源が全体的に増えて多様化します。一方で、情報源として「学校」という回答のみがやや減少し、性交に関する情報源として学校の比重が軽くなるのがわかります。

性別にみると、男子では「インターネット」「友人・先輩」、女子では「学校」を情報源とする者が多く、性交に関する情報源のうち、比率はそれほど高くはない。いえ、「ポルノ雑誌」「アダルトビデオ」は基本的に男子が独占しているメディアです。女子にのみ特徴的なものは「付き合っている相手」です。男女の差は、大学生になるとさらに拡大していきます。

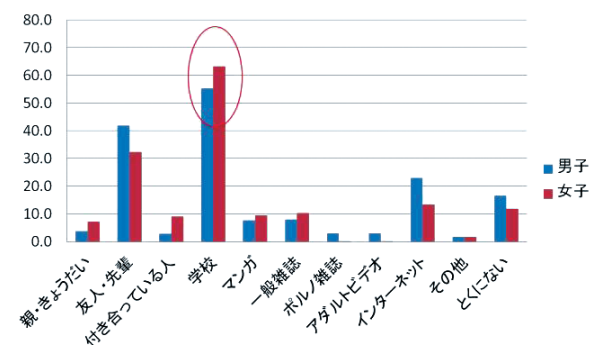
高校生や大学生で性交情報源が「とくにない」という回答は、女子のほうが若干多かったのですが、中学生では男子より女子のほうが情報源を持つ者が多い（「とくにない」は男子26%、女子19%）です。

中学生の性交情報源のなかで、女子ではとくに、「マ

図表1 高校生の性交情報源（男女別）



図表2 高校生の避妊情報源（男女別）



ンガ」や「雑誌」をあげる者が男子より多く、ローティーン女子にとってマスメディアの影響力は小さくないと考えられます。高校生や大学生とは傾向が異なり、中学生では、やや女子のほうが、マンガや雑誌などの形で身近にアクセス可能な性情報源があるか、あるいは性情報に対してアクティブである様子がうかがえます。

避妊に関する情報源

避妊の情報源についてはどうでしょうか。避妊についても、「友人・先輩」は多いのですが、それを上回って「学校」を情報源とする者が多かったです。

性交の情報源と同様、「友人・先輩」が多いものの、それを上回って「学校」に頼っています。

高校生・大学生ではともに、1位学校、2位友人・先輩、3位インターネットの順です。いずれも男女差があり、女子では「学校」を、男子では「友人・先輩」「インターネット」を情報源とする回答が多いです。

一方、避妊の情報源をもたない高校生は、性交情報源とは異なり、男子のほうが女子より若干多いです。

このように、性交の情報源と避妊の情報源は、学校段階や性別によって様相が異なるものの、共通して「友人・先輩」と「学校」が大きな情報源です。なか

図表3 男女・性交経験の有無別にみた性交情報源（性交・避妊）

（％）

		性交情報源						避妊情報源					
		友人・先輩	付き合っている人	学校	マンガ	一般雑誌	インターネット	友人・先輩	付き合っている人	学校	マンガ	一般雑誌	インターネット
女子	性交経験あり	71.9	44.8	22.6	18.8	17.4	28.5	52.3	30.2	41.3	7.6	14.9	18.4
	性交経験なし	49.6	4.1	42.6	24.3	16.1	23.2	26.5	1.9	70.2	10.5	9.3	12.4
		友人・先輩	付き合っている人	学校	ポルノ雑誌	AV	インターネット	友人・先輩	付き合っている人	学校	ポルノ雑誌	AV	インターネット
男子	性交経験あり	79.0	21.9	28.5	13.4	33.9	50.5	64.3	16.7	62.4	7.0	6.5	35.7
	性交経験なし	67.2	1.6	27.4	8.6	12.6	46.8	37.7	0.2	53.6	2.2	2.3	21.1

でも、避妊について「学校」を情報源とする者は多く、重要な役割を果たしているといえます。

そして、大きな変化として、「インターネット」が近年急速に情報源として大きな位置を占めてきており、旧来のポルノ雑誌やアダルトビデオへの接触が廃れつつあることが挙げられます。とりわけ、高校生と大学生にとってその変化は顕著で、早晩、中学生にもその動きが現れるのではないかと推測されます。インターネットはポルノ情報であると同時に、正確な知識を得るリソースともなっていると考えられます。

「学校」は、性的関心がある人と同じぐらい、関心がない人も情報源にしています。性的関心がなくても、必要な情報を与えることができる可能性があるのが学校であるということが出来ます。

特に、避妊の情報源において、「学校」というのは大きな役割を果たしていることがデータからわかります。

性交経験別にみた情報源

性情報への接触は、性的関心があるかないか、また性交経験があるかないかでも、大きな違いがみられます。

性交経験の有無による性情報源（性交・避妊）の違いを比較した結果が図表3です。性交経験がある女子の性交情報源がとりわけ特徴的で、「学校」は性交経験がある女子高校生にはあまり頼りにされていません。性交経験をもつようになると、男子は性交情報を「AV」へ、避妊情報を「友人・先輩」「インターネット」へ、女子は性交・避妊の情報源として「学校」に代わって「友人・先輩」か「付き合っている人」を頼るようになる、ということがうかがえます。

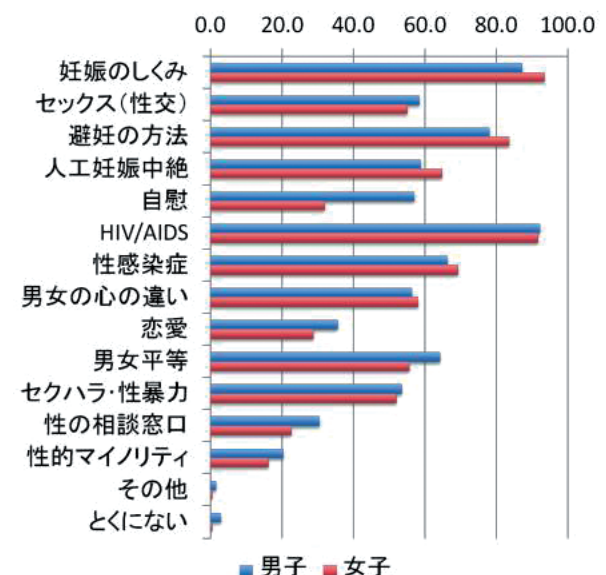
性交経験がある、性の当事者性が増すことによって情報源は変わっていきます。「学校が性に対する関心を

あおって、性行動を起こさせている」「寝た子を起こすな」という議論がありますが、この結果では、性交経験がある子は「学校」を頼りにしていないというデータが女子に出てくるので、その議論の証拠にはならないのではないかと思います。性交経験がある前には学校での性教育で興味をもったということも否定できませんので断定はできませんが、いずれにせよ、「学校」という情報源は、性交経験があるかどうかによって頼り方が変わるということになります。

学校での性教育

ここでは、高校生の男女別のデータを図表4に示します。学習したという項目は、「妊娠のしくみ」「避妊の方法」「HIV/AIDS」で8割を超えています。「性感染症」は8割にはいってないですけれども、6割を超えているということで、だいたい学習指導要領に示され

図表4 学校での性教育①（高校生）



ている保健体育の内容に即していると思います。

性教育で議論になってくる「セックス（性交）」については6割ぐらいです。学習指導要領では性交は扱わないとなっていますけれども、6割の子は習ったといっています。

男女で違いがあるのは、「自慰」です。男子は自慰について習っているけど、女子はあまり習っていない。これは、保健体育で性教育を扱うことが多いのですが、保健体育は体育とセットで行われることがあり、授業が男女別に行われることによって、男子には自慰のことをよく教えるけれども、女子には教えていないという実態が反映されているのではないかと思います。

今回、新しく「性的マイノリティ」という項目を入れました。性的マイノリティについて学習したかどうかという、2割ぐらいです。

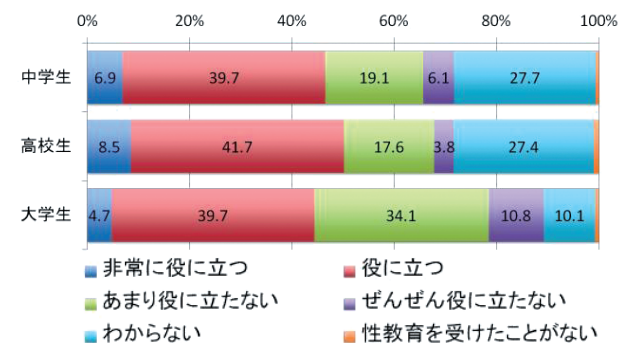
2000年代にバッシングが激しくなって以降、学校での性教育はどのように変化しているのでしょうか。前回調査、前々回調査と中・高・大学生の結果を比較したところ、中学生で大きく既習率が伸びています。とくに、「男女の心の違い」「恋愛」「セクハラ・性暴力」といった性の心理・社会的側面についての内容で学習率が大きく伸びていることが注目されます。ただそのなかで、男女平等に関する内容はそれほど伸び率が大きくないのは、同様に2000年代に強いバッシングが起こったジェンダーフリー教育への抵抗感が学校に残っていたためかもしれません。

高校生や大学生についてみると、中学校や高校の保健体育で学習する内容（妊娠のしくみやHIV/AIDS）については、それほど大きな変化はないものの、自慰について「学習した」という回答がどの学校段階でも増えています。また、中学生と同様に、性の心理・社会的側面についての既習率がやや上がっています。

前々回1999年と前回2005年の間では、調査項目が大きく変わったために厳密に比較することはできないものの、「セックス（性交）」や「避妊の方法」の項目で既習率が上がっており、青少年が性行動を行う可能性をふまえた教育・指導の方向に向かっていることが示唆されます。これは、性教育の深まりや広まりと見ることも可能ですが、バッシングの影響を受けて、性教育が道徳的・規範的な側面を強めているという可能性もあり、より質的な検討が求められる点です。

さらに、性教育ですので、セックス（性交）がどの

図表5 「性教育は役に立つ」と思うか？



ように教えられているのか、いろいろ工夫して探してみました。「セックスを教えるなんてけしからん」ということも言われますので、ほかの項目との関連をみてみました。ここで取り上げたのは、「恋愛」と「性交」の既習率の関係ですが、恋愛を学習している人のほうが性交も学習していて、相互に関連があります。他の分析結果もあわせてみて、性交だけを取り上げて教えているのではなくて、恋愛と一緒に教えたり、自慰との関係で教えられたり、社会的文脈の中で関連づけられて教えられていることがわかりました。その結果、単独で教えられているというよりは、セックスを一つの指標とすると、性教育として性の多様な側面が教えられるようになってきているのではないか、ということがみえてきました。

このような現状に対して、「性教育は役に立つと思われるかどうか」ですが、あまり変化はみられませんでした（図表5）。6年前もその前も比率はあまり変わりません。「非常に役に立つ」は少ないですが、「役に立つ」が5割前後です。大学生では「役に立つ」という回答はそんなに変わりませんが、「あまり役に立たない」という批判的な意見が大学生では増えています。「習ったけれども役に立つかどうかわかりません」という回答が、中学生と高校生で4分の1ずついます。

分析をしてみると、性交経験がある者や、関心がある者のほうが「役に立つ」と考えています。ほかのものを性情報源にしても、学校の性教育は役に立つと感じていて、関心がある者のほうが、性教育は大事だと思っているということがいえそうです。

性情報源が性知識と価値観に及ぼす影響

「性知識」については、前回調査から尋ねるようになりました。今回は6項目入れました。

1つ目は「陰外射精は確実な避妊の方法である」、2つ目は「排卵はいつも月経中に起こる」、3つ目は「精液がたまり過ぎると体に悪い影響がある」などです。

項目を全部示せないで省略しながら示しますと、高校生のデータでは、「陰外射精」については正解率が6割強です。「ピル」については、新設の項目なので知識が増えたかどうかはわかりません。

「月経中の排卵」が正しいかどうかというと、これは「間違っている」という回答が正解になるのですが、男子は15%ぐらいの正答率で、女子でも4割ぐらいです。男女差が大変大きい。これは前回調査と比べても、さほど変わっていません。

「射精」は、男性が正答率5割弱、女子は15%で、異性の生理については、本当に頭に入っていないというか、理解していないということがよくわかります。

「性感染症」と「HIV/AIDS」についても、「性感染症になると、不妊症になることがある」という回答が正しいのですが、女子のほうが正答率は高いです。男子は4割を切っています。「わからない」という回答も多い。「日本でHIV/AIDSは、減少し続けている」という回答も間違っているのですが、正答率は5割にいないという結果です。

性知識については、私が分析者として「これぐらいは知っているのではないか」と思う域に達していませんでした。正解が半分を超えているのは、高校生ではこの「陰外射精」しかないですから、正答率半数弱というのは、ちょっと少ないのではないかと感じています。

次に、性知識が「行動」や「価値観」とどう関係しているかという分析結果をご紹介します。

避妊実行についてです。男子の場合は、「避妊を実行している人」と、「ときどきする」という「不徹底な人」「避妊しない」という人の2つのグループに分けたときに、「避妊をいつも実行しています」という人のほうが性知識が高い。ということは、性知識があることで、避妊を実行できていると解釈ができます。

しかし、女子の場合は、「避妊をいつもやっています」という人と、「時々しないことがあります」「しません」という不徹底の人、この2グループでみたときに、性知識にはあまり差がありません。性知識があっても避妊がちゃんとできていないということです。日本の場合は、青少年に限らず、コンドームによって避妊をする率がとても高いです。そのときに、男子は避妊に



中澤氏の報告

対して主導権というか、責任を持って取り組むでしょうけれども、女子は相手次第のような部分があるのかもしれない。

だから、知識があっても行動に移すことができていないという側面が、特に女子にみられるので、知識だけ与えれば何とかできるというものではありません。

でも、知識がなかったり、知識がないだけではなく間違った知識を持っていたら、それもまた問題になりますので、両方大事なのですが、ここにどう介入するかということとはとても大事な課題になると思います。

もう一つ、性情報源と性規範との関連で、「インターネット」についてご紹介します。

性交に関する情報源をインターネットから入手している場合と、していない場合で、性に関する考え方に差があるかどうかをみてみました。すると、インターネットを情報源としている者のほうが「愛のない性交」や「知り合ってからすぐの性交」を許容していて、性に対する規範意識は弱かったです。

そのほか、マスメディア接触について、男子は「アダルトビデオ」を、女子は「マンガ」の分析をしました。そうするとどちらも「それを性情報源としている者のほうが「いいんじゃない」「かまわない」と答えていたので、マスメディア、インターネットは性に関する考え方を許容する方向に影響を及ぼしている可能性がある、と指摘したいと思います。

性教育の課題

まとめますと、性知識は全体的に若干低下傾向にあるけれども、学校の性教育は性知識に一定程度貢献をしています。しかし、インターネットのほうがより影響力が強そうです。

高校生の男子は、「友人・先輩」を性情報源にしても性知識は向上しません。「友人・先輩」でなく、「友人」と「先輩」とに分けたときや、「異性の友人」と「同性の友人」ではどうだろうかなど、もっと細かく聞きたいところもありますが、いずれにせよ、高校生の男子の場合、友人の情報では性知識は向上していません。

女子の場合は、性知識があっても避妊の実行には結びつかないという課題が指摘できます。

また、マスメディアやインターネットに接触している者は、性規範が弱い傾向があるということが、性情報源と性の知識、価値観、規範との関係からわかりました。

では、このような状況に対して、性教育の課題は何だろうかと考えてみました。

1つ目は、性的関心の有無によって、性情報への接触が大きく左右されることに関連してです。性知識の獲得にも差がみられました。性的関心のある者のほうが、性知識は高かったです。当たり前といえば当たり前で、性的関心があるから性情報に接触して、性知識を得ていく、そういう流れだと思われます。

では、性的関心が薄い青少年にとっては、性教育は要らないのか。そんなことはないと思います。学校での教育、学習というのは、その子が知りたいから学ぶということばかりではない。知りたいかどうかは別として、必要だから教えようということなのに、性教育だと、「ニーズがないのなら、やらなくてもよいのでは？」となるのが不思議です。準備教育としての意味合いも含めて、しっかり教えて伝えていくことが必要だと思います。関心がないということは、なかなか効果が上がらないということなので、どうすればよいかが課題になろうかと思います。

そもそも、なぜこれを学ばなければいけないのかという意義をしっかり伝えることが大事かと思います。「自分にとって関連がある大事なことなのだ」とわかるような関連づけも大事です。どうしても一斉授業、一方向で伝えていくタイプの授業になりがちですが、個別の指導であったり、その子のニーズに合ったものをどう工夫していくかが、とても大事なところかと思います。

そして、友人からの情報は、特に男子では性知識の向上につながらなかったの、友人との会話をどのように批判的に取り上げていくかということも、検討さ



ディスカッション・Q & A

れてもよいのではないかと思います。

2つ目は、性知識があっても必ずしも避妊の実行に結びつかないという女子の現状に対して、自他を尊重し、責任ある行動をとっていくための性的自己決定力をどのように養っていくかです。一方的に教えられても力は付かないので、自分だったらどうするか、あなたはどうか考えるのかを小さなグループで話し合うなど、そういう学習はとても大事なのではないかと考えています。

先ほど、自己決定でもってリスクを冒さなくなる、好きな子に対してもアプローチしなくなるという報告がありました。「ハイリスクの行動」といったときには、「避妊をしない」とか「安易にセックスをしてしまって後悔する」とか、いろいろありますけれども、逆に、「好きなのに何も行動を起こせない」ということは、「そういう『リスク』をとれない」ということなので、「自己決定をすることができない」ということになろうかと思います。性行動の活発な層ばかりに目が行ってしまっていますが、そういうところも広くいろいろな生徒、青少年に合ったアプローチの仕方を考えていけるとよいと思います。

最後に、インターネットが急速に普及していきなから、メディアリテラシーがとても大事になります。それから家庭の環境、学校の環境、学校適応について、学校を楽しんでいるか、家庭が楽しいか、性行動や性に対するイメージが全然違ったという報告がありました。そういうことも踏まえて、性教育にはアプローチの課題がたくさんあり、取り組みのしがいがある領域ではないかと考えております。

本セミナーで発表された報告の内容を含めた「第7回青少年の性行動全国調査」の分析結果の詳細は、『若者の性』白書』として、8月1日に小学館より単行本として刊行される（詳細は13ページ参照）。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第4回 文部省純潔教育委員会の発足

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士（保健学）

文部省社会教育局が1947（昭和22）年1月7日に通牒した「純潔教育の実施について」の備考では、「本省に於いては近く純潔教育に関する権威ある委員会の設置運用をはかり、講師の養成、あはせて良書の選しょう、映画の製作をなす等の計画を持っている」と述べられており、同年6月4日、文部省内に「男女間の道徳を確立し、社会の純化を図るに必要な純潔教育に関する具体的方策を調査審議し、又進んでこれに関し建議することを目的とする」⁽¹⁾ 純潔教育委員会が設置されます。そして、翌々年の1949年1月28日に文部省社会教育局名で都道府県教育委員会宛に「『純潔教育基本要項』送付について」（発社41号）が通牒されます。

今回は、この純潔教育委員会について見ていきますが、私の調査不足もあり、不明瞭な点も多々残されています。まず、純潔教育委員会のメンバーについてです。「純潔教育委員会規程」には「委員長」「副委員長」「幹事」「書記」についての規定がありますが、ガントレット恒子が委員長であったこと以外は、誰がこれらの役を担当していたのかを私は確認できていません。さらに、同規程には、「本委員会は関係官公庁職員及び学識経験ある者四十人以内をもって組織する」とありますが、後世に作成されたものも含めて、委員について以下の3種類の名簿の存在が確認できます（a.35名掲載⁽²⁾、b.25名掲載⁽³⁾、c.40名掲載⁽⁴⁾）。運営期間内にメンバーが追加されていたという可能性もありますが、いずれにせよ、これらの名簿からは、委員が、①戦前からの娼婦運動団体の関係者、②文部省や厚生省、法務庁などの官僚や公務員、③医者などの医療関係者、④学校教育関係者、を中心に構成されていたことがわかります。前回述べたように、戦後の純潔教育施策の起点が私娼の発生防止と保護対策にあったことを考えると、象徴的なのは、委員長となったガントレット恒子をはじめ、久布白落実、千本木道子、小笠原嘉子、村岡花子、杉原錦江といった日本基督教婦人矯風会関係者や、植村益蔵、山室民子といった救世軍関係者も含め、伊藤秀吉、高嶋米峰など、多数の娼

娼運動家が名を連ねていることです。ただし、委員の人数がどのような経緯で進められたのかについても不明です。娼風会側の資料に「（引用者注；日本基督教婦人矯風会が）文部省に働きかけて、純潔教育委員会設置」⁽⁵⁾ という記載があり、もし、この認識が正しいのなら、娼婦運動家の純潔運動に文部省が取り込まれたということになりますが、今のところ、真偽のほどは検証されていません。

また、「純潔教育基本要項」の発表までに、純潔教育委員会が何回あるいはどのくらいの頻度で開催されたのかについても、今のところ把握していません。まず、「純潔教育の実施について」通牒後の1947年2月4日に準備委員会が開催され、このときに、準備委員会の議長の選出や委員会の準備、委員会の組織、何を論議するか、下部委員会の組織といった点とともに、「純潔教育（purity education）の意味や内容」、「家庭・学校・社会教育団体・労働組合での純潔教育」、「純潔教育の教材」、「映画、写し絵、紙芝居、出版物、展覧会や研究会による純潔教育」などについて論議されたことが、翌日、CIE（GHQの民間情報教育局）に報告されています⁽⁶⁾。そして、同年6月4日に第1回純潔教育委員会総会が開催され、この6月4日が、後世の文部省社会教育局作成資料⁽⁷⁾でも、これまでの性教育史研究等⁽⁸⁾でも、純潔教育委員会の発足日とされています。

【注】

- (1)「純潔教育委員会規程」(社会教育連合会編『純潔教育基本要項（附 性教育のあり方）』印刷局1949年6月20日 pp.44-45 収録)。なお、『性暴力問題資料集』第1巻 不二出版2004年 p.30には「純潔教育委員会規程案」が収録されているが、「純潔教育委員会規程」との違いは、漢字の一部が旧字である点だけである。
- (2)「純潔教育委員会委員」1947年1月(『性暴力問題資料集』第1巻 不二出版2004年 p.30 収録)
- (3)「純潔教育委員会委員」(社会教育連合会編『純潔教育基本要項（附 性教育のあり方）』印刷局1949年6月20日 pp.45-46 収録)
- (4)文部省社会教育局『社会教育における純潔教育の概況』1967年 p.136
- (5)「日本キリスト教婦人矯風会年表」『日本キリスト教婦人矯風会百年史』1986年 p.1034
- (6)Program of committee on sex education. 1947年2月5日 CIE (A) 00321
- (7)文部省社会教育局『社会教育における純潔教育の概況』1967年 p.2
- (8)日本学校保健会編『学校保健百年史』第一法規出版1973年 p.331、など

正体見たり枯れ尾花

米最高裁が伝統的な男女の結婚しか本当の結婚と認めないとした連邦法の結婚防衛法（DOMA=Defence Of Marriage Atc）を違憲と判断したというニュースは日本でも大きく報道されました。ところが半年ぶりに帰っているこの日本国内で、なんだかみなさん、そんなニュースにきょんとしているというか、うーんと唸って思考停止な感じなのですね。

そこでふと気づきました。若者を中心に欧米でも日本でもゲイのこと、あるいはもっと広げてLGBT一般のことを本や映画やテレビなどから、あるいは実生活上でもどんどん知ってきている層がある一方で、そういうことをまったく知らない、LGBTの当事者などとも会ったことのない、知っていることと言えばマツコやミッツやはるな愛のことだけという人たちがどっかりと控えているのです。そういう人たちにとってはゲイっていうのはいまでもなんか変な連中、奇妙なヘンタイ、オカマ、異常者、性的倒錯者なんだな、と。「だって同性愛とかって、言ってみればエッチなシュミの問題でしょ？ そういうのがシュミで結婚させてほしいなんて、どうよ？」と、これはきわめて反語に近い疑問形なのです。

1969年6月にニューヨークのストーンウォール・インでゲイやレズビアンたちが暴動を起こしたときも新聞の見出しは「Homo Nest Raided, Queen Bees Stinging Mad」（ホモの巣を摘発 狂い刺す女王蜂たち）でした。そう、このころは「ホモ」たちは奇怪な性のバケモノでした。そして日本にはいまでもその段階で取り残されている、置き去りにされている人たちが圧倒的に多い。そんなところに突然「同性婚」です。「はあ？」となるのは当然でしょう。

そういう人たちにいったいどう説明すればよいのでしょうか？ 70年代から欧米の大都市部ではゲイたちのカミングアウトによる可視化が進み、80年代のエ

イズ禍を経験して「理想の男」だった俳優ロック・ハドソンがゲイだとわかったりしてその悲劇に社会的な同情も急速に拡大し……云々、と説明したところでそれもどうせ外国の話です、「外国人は日本人と違うよ」という常套句に阻まれてしまうかもしれません。

たしかにそうやってものすごい時間をかけて欧米などではLGBTたちもほんとうにすぐ隣にいる身近な生活者なのだということが徐々に徐々にわかってきた。ストーンウォールから44年もかかっている、自分の周囲の親しい友人や家族親戚にLGBTの人がいる、と答えた人が57%いるような状況になったのです。そんな環境も下地も何もない日本で、同性婚と聞いてきょんとしたからといって、それは責められません。

同性愛は異常でも倒錯でも何でもない、という言説はすでに溢れています。しかしそれを繰り返して知識、頭でわからせても納得は伴わないのです。だって、周りにだれもLGBTがいないのですから！

だからLGBT当事者にはカムアウトの必要がある、というのもすでにありふれた言説です。でも、もうひとつ、こんな思考実験も有効かもしれません。それはたとえば、学校なり職場なりで自分の同僚全員がゲイやレズビアンだと仮想してみることです。

「えー！」と思われるかもしれません。しかし、そこで戸惑ったり疑心暗鬼になっている自分がいるとすれば、その自分こそが問題なのだ、と気づくことができます。なぜなら、同僚全員はいままでと何も変わらずにそこにいてそこで仕事をしているのです。女装／男装もせずシナを作るわけでも自分を襲うそぶりを見せるわけでもなくそこにいままでと変わらずに存在している。なのにただ彼らがゲイだレズビアンだと知って動じている自分がある。それはおかしくないか？

欧米で44年かけて気づかれてきたことはそういう事実だったのです。「正体見たり枯れ尾花」。問題は枯れ尾花ではなく、それを幽霊だと見ていた自分だった。それを即製で気づかせてくれる思考実験です。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第28回

「自信」という名の小さな芽

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態の MtF トランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

6月の教室はとにかく暑い。暑くなると、生徒たちはぐったりして寝てしまいます。もっとも、クーラーがきくと、気持ちよくなって寝ちゃうんですが…。

閑話休題。

2002年1月のある日、その後のわたしの人生を大きく変えることになる電話がかかってきました。「雑誌『部落解放』がセクシュアルマイノリティの特集を組む。その座談会に出ないか」というものでした。わたしは悩みました。『部落解放』に出るということは、とりもなおさず、「いつき」であることを黙り「土肥」で通してきた世界に「いつき」であることをあかすことになるからです。信頼する先輩に相談すると「お前に話せる内容はあるのか?」と言われました。しかし、わたしを推薦した人に理由をたずねると「他のメンバーには『揺れ』がない。それではおもしろくない。だから『揺れている』いつきさんはどうかなと思った」という答が返ってきました。名前は隠せば済みます。「それなら座談会に参加しよう」と思いました。

翌日、先輩に「座談会に出ることにしました」と言うのと、「実名を出したら」という返事が返ってきました。予想もしない返事にとまどうわたしに、先輩は「なにがこわい?」とたずねました。その瞬間、かつて「やっぱり自分のことは言えへん」とつぶやいた在日の生徒の苦しそうな顔が浮かびました。そして、「怖さは自分の内側にある」「自分が越えなくちゃならないのはこの壁なんだ」と気づきました。わたしは「たしかにその方がすっきりしますね」と笑顔で答えました。

座談会には「土肥謙一郎／いつき」という名前で参加しました。この座談会に出たことをきっかけに、わたしは「無理に話す必要はないけど、無理に黙る必要もないんだな」と思えるようになりました。

同じ1月、宮崎県同教の当時の事務局長Nさんとの出会いもわたしの人生を変えたできごとでした。宮崎で開催された日教組の教育研究集会にあわせて、セクシュアルマイノリティ教職員ネットワークと宮崎県同教の交流会がありました。わたしは、本名を名のつ

た在日の生徒のことや、クラスの仲間に自分の出身を語った部落の生徒のことを話しました。他のメンバーが帰ったあとも、Nさんは「いつきさん、もうちょっと残って」とわたしを誘い、夜遅くまでふたりで語りあいました。別れ際にNさんは「また会いましょう」と言われました。その「また」の意味がわかったのは4月になってからのことでした。わたしを呼んで県同教主催の学習会を開きたいと言ってこられたのです。

それまでわたしはセミナーの発題程度のことはしたことがありました。しかし、しょせんそれは仲間へ向けて自分のことを説明するためのものでした。しかし今回の学習会は、まったく意味が違います。参加者は、わたしの話を通してなにかを得るために来られます。

なにを話せばいいんだろう…。自分の心の中にあった箱のこと。生徒たちに「自分のことを語ろう」と言いながら、自分はその箱を見つめようとしていなかったこと。互いに自分のことを語りあう生徒たちの姿を見ながら「君たちの問題は人権問題じゃないか」という嫉妬心を持っていたこと。そして、「やっぱり自分のことは言えへん」と言った在日の生徒は、ほんの少し前の自分のことだと気づきました。もしかしたら、ようやく自分と向きあいはじめたわたしの姿を語ることが、話を聞いてくれた人が自分と向きあうきっかけになるかもしれない。それでいいと思いました。

当日は300人ほど入るホールが満席でした。わたしは2時間半、夢中で話しました。

数日後、Nさんから「感想を読んで驚いています。県同教が開催する研修会の感想はたいがいパターン化するのですが、今回はバラエティーに富んでいます。とにかく異常なほどの反応があったことだけは事実です」というメールが来ました。

言葉には人の心を動かす力があるということ、この時はじめて実感しました。「自分にも語れるなにかがある」という思いは、わたしの心の中に「自信」という名の小さな芽を生み出しました。同時に、言葉の力の「強さ」へのおそれもまた感じました。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

性は生涯学習のテーマ

池上千寿子さんは、性科学のパイオニアで、2011年、性科学界のアカデミー賞ともいわれる WAS (World Association for Sexual Health) 金賞を、日本人女性として初めて受賞した。すでに単共著書、翻訳書が50冊を超えるが、今回、学校や家庭向けに、外せない基本のキをコンパクトにまとめた本書を著した。

学校教育では、性は第二性徴で取り上げられることが多く、性欲や生殖を中心にした「下半身問題」になりかねない。性教育は「寝た子を起こす」、子どもの性行為の奨励かと批判も浴びている。保護者の避けたい気持ち、苦手意識も強い。

そこで「性とはなにか」——「いのちと自尊感情」をキーワードに、ゆれ動く思春期や、大人にしてほしい対応、関係とコミュニケーション、多様な性のありよう等を解きほぐしていく。“からだや性について安心して語れて、相談できる大人”になるための手引書である。

学校では授業のみならず集団遊びや活動を通して、家庭ではわが子のニーズにあわせ、子どもと一緒に性を語り、考えることを勧める。子どもが性に関する問いを発した時、答えが分からなくても大丈夫。「一緒に調べてみよう」でいい。読み進むうちに、性教育に忌避感の強い大人も、肩の力が抜けてくるだろう。

「大人の役割は子どもが自分で考え行動するのを促すことであり、自尊感情の根にどんどん水をやること」「必要なのは『どんなことがあっても、あなたを抱きとめてあげるよ』という大人の存在」と訴える。性に無関心でも、女の子に強い性欲があっても、同性が好きでもおかしくない。「あなたはあなたでいい」「いろいろな性的存在があり、それぞれが生きやすい環境が大切」というメッセージが、誰にも相談できない子どもに伝わるかどうか。

文科省は、性器の名前を使わないように指導している

性について語ろう

子どもと一緒に考える

池上 千寿子

「あるがままのあなたでいい」
そのことを伝えたい
からだとともにのふしきと向き合いながら、
大切な態度をつなげるための一冊。

性について語ろう 子どもと一緒に考える

池上千寿子

岩波書店(岩波ブックレット)

525 円 (税込み)

が、「あそこ」とか誤摩化すのではなく、家庭で楽しく安心して語れる言葉を使うことをアドバイスする。例えば、ペニスをチンチン、(この言い方は我が家だけと断ったうえで) ワギナをトントンなどと。ほとんど話題にならない「オリモノ」について、その自浄作用を知って「かっこいい!」という池上氏が、かっこいい!

著者と生徒たちとのやりとりや、豊富な例が、リアルな性教育のありようを伝える。「セックスは若いときの特権」と思い込んでいた男子生徒たちが、「“賞味期限”はないのと同じ」と聞いて、「へー、そうなの!」と驚嘆する。キスもセックスも早い方がかっこいいと思ってきた女子中学生が、講演後の感想文に「自分の気持ちの方を大事にすればいいんですね。よかった!」と書いてくる。

同性愛に悩む男子が、テレビの「おねえキャラ」を役割モデルにしにくく、悩みを深めていたら? 教室に性別違和の葛藤を抱える子がいたら? 娘の部屋から、女子向けの風俗バイトの情報誌が出てきたら? レイプ被害を打ち明けられたら? なるほど、こんな対応があったかと目から鱗が落ちる記述も多い。

提唱するコミュニケーションの五つのルールは「自分がされたり、言われたりしたら嫌なことは相手にしない、言わない」「自分のことは自分で言わなければ相手に伝わらない。相手のことは相手に聞かなければ分からない」「性関係をもつようになったら性の健康を守る」など、誰にでも役立つ鉄板の法則だ。

噛み砕いたやさしい記述の裏に、幅広い知識や深い洞察がうかがえ、薄いパンフレットにも関わらず、内容は盛りだくさん。ふとした一行に救われたり、パッと視野が広がったように感じる人もいるだろう。悩める思春期を送った、かつて子どもだったあなたにも、効く本。

ただ、「スカートめくりやチンチンいじりにふける男の子がいても、じきに飽きます」「ほうっておきましょう」という助言に、それで済む子ばかりではないという思いはよぎった。(フリーライター まつばら けい)

全国性教育研究団体連絡協議会

▶▶ 8月8日(木) 12:30～16:30
8月9日(金) 9:00～16:30 ◀◀

第43回 全国性教育研究大会

第21回 近畿・北陸・東海地区性教育研究大会

テーマ 『主体的にいきることから 生き方を考える』
～いのちをはぐくみ 人との絆を築くために～

内 容

- 1日目**：13:00～13:30 **開会行事** 挨拶・祝辞・次期開催地紹介
13:35～14:05 **開催地報告** 「奈良県性教育研究会の実践」奈良県性教育研究会
14:10～14:50 **基調講演** 「学校における性に関する指導について」城戸 茂（文部科学省国立教育政策研究所特別活動調査官）
15:00～16:30 **記念講演** 「万葉びとの生と性」上野 誠（奈良大学教授）
- 2日目**：9:30～12:00 **分科会** 「小学校における性教育の実践」「中学校における性教育の実践」「高等学校における性教育の実践」「青少年の性教育の実践」「性とメディアリテラシー」
13:30～15:00 **課題別講義** 「トランスジェンダー生徒交流会からの発信」土肥いつき（京都府立高等学校教員）、「女性専用外来から見た性の課題と対応について」島本郁子（奈良県立医科大学附属病院臨床教授）、「ライフスキル形成を基礎とする性教育の理論と実践」川畑徹朗（神戸大学大学院教授）、「学校の教育活動全体を通して行う性教育」堀内比佐子（全国性教育研究団体連絡協議会監事）
13:30～15:00 **参加型講義** 「医療職サイドとして、性と生を考える」中谷里子（奈良県助産師会ハートポケット助産師）
15:10～16:40 **報告** 「青少年の避妊に関する意識と行動の変化（第7回『青少年の性行動全国調査』より）」土田陽子（大阪府立大学 非常勤講師）
15:10～16:40 **実践発表** 「特別支援教育の視点で行う通常学級における性教育」「中学校における実践『異性の友人との関わり』」「高校生に対する子宮頸がんの予防教育の実践」

会 場 奈良 公立学校共済組合「春日野荘」（奈良市法蓮町 757-2）

定員・参加費・問い合わせ

参加費／一般 6,000 円、学生 4,000 円、1 日参加：一般 3,000 円、学生 2,000 円。定員／300 名。

主 催／全国性教育研究団体連絡協議会、近畿・北陸・東海地区性教育研究団体連絡協議会、奈良県性教育研究会。

協 賛／日本性教育協会。後 援／内閣府、文部科学省、厚生労働省ほか。

申込み・連絡先／〒634-0007 奈良県橿原市葛本町 625 橿原市立耳成小学校 養護教諭・大杉 好

TEL 0744-22-2265 FAX 0744-22-9642

締 切／平成 25 年 7 月 3 日

▶▶ 8月24日(土) 13:30 ~ 17:30 ◀◀

関西性教育研修セミナー2013 夏

「オトコと性、神話と科学」

内 容 2012年の思春期学会でもシンポジウムのテーマとして取り上げられ、2013年7月の“人間と性”教育研究協議会・第32回全国大会の理論講座でも「いまこれからの性教育の中心課題の一つ」として取り上げられる「男子の性」をテーマに、科学的知識を確認し、性教育のあり方について学ぶ。

講 師 関口久志氏(京都教育大学教育支援センター准教授/季刊『セクシュアリティ』副編集長)
小堀善友氏(獨協医科大学越谷病院泌尿器科・医師/日本性科学会セックスセラピスト) ほか

会 場 大阪府立大学「I-site なんば」2階C3室
大阪市浪速区敷津東2-1-41 南海なんば第1ビル TEL06-7656-0441(会場問い合わせのみ)

参加費・問合せ先等

参加費/1,000円(事前申込)・1,500円(当日) 定員/50名 対象/性教育に関わる方、テーマに関心のある方。
主催/関西性教育研修セミナー運営委員会 協賛/日本性教育協会
事前申込み・問合せ先/E-mail higashi@sw.osakafu-u.ac.jp FAX072-254-9793(大阪府立大学・東研究室)
お名前・所属・当日の連絡先(携帯電話・携帯メールなど)を明記してお申込下さい。

8/2(金)

8/4(日)

ハートブレイク セクシュアリティを伝えるための学習会

2013年度宿泊学習会・すてきな性教育[ベーシックコース]

セクシュアリティに関する基礎知識と最新情報を学ぶとともに、セクシュアリティを伝えるために自分と向き合い自分を知ることも含めて体験学習。

【会 場】 兵庫県篠山市・ハートブレイクセミナーハウス

【問い合わせ先等】 定員/8名 参加費/30,000円 研修費・宿泊費(2泊3日の朝食・昼食・夕食)込み

主催・問合せ先/〒564-0001 大阪府吹田市岸部北3-29-11 ハートブレイク大阪事務所

TEL 06-7504-6489(平日10:00~17:00) FAX 06-7504-6490 E-mail heart-sasayama@nike.eonet.ne.jp

8/31(土)

9/1(月)

第32回日本思春期学会総会・学術集会

「思春期の子どもたちをとりまく環境と健康」

【内 容】 理事長講演「国際的な視点から見た思春期の健康政策」林謙治(国立保健医療科学院)、会長講演「子どもたちを取り巻く環境変化と思春期発育」宮下和久(和歌山県立医科大学)、教育講演「思春期のライフスタイルと健康」大関武彦(浜松医科大学)、シンポジウム、パネルディスカッション、特別企画、ランチョンセミナー、ほか。

【会 場】 ホテル・アバローム紀の国 2階大会議室「鳳凰の間」3階「孔雀の間」ほか(和歌山市湊通丁北2-1-2)

【問い合わせ先等】 参加費/当日申込10,000円、事前申込8,000円、学生5,000円、抄録集1部3,000円、懇親会5,000円。

問合せ先/〒641-8509 和歌山市紀三井寺811-1 和歌山県立医科大学医学部衛生学教室内

第32回日本思春期学会総会・学術集会事務局(担当:南出)

TEL & FAX 073-441-0646 E-mail jsa2013@wakayama-med.ac.jp

「若者の性」 白書

緊急発売!!

8月1日(木)

本体2,310円(税込)

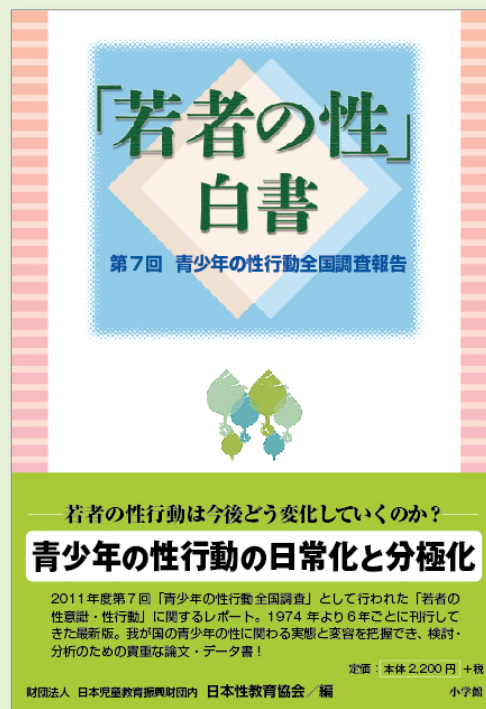
●A5判256P

第7回 青少年の性行動全国調査報告

2011年度第7回「青少年の性行動全国調査」として行われた「若者の性意識・性行動」に関するレポート。1974年より6年ごとに刊行してきた最新版。我が国の青少年の性に関わる実態と変容を把握でき、検討・分析のための貴重な論文・データ書!

◆ 主な内容 ◆

- 序章 第7回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度
- 第2章 欲望の時代からリスクの時代へ
—性の自己決定をめぐるパラドクス—
- 第3章 青少年の家庭環境と性行動
—家族危機は青少年の性行動を促進するのか—
- 第4章 消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識
- 第5章 青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識
- 第6章 高校生・大学生の避妊に関する意識と行動
—避妊行動の分化に着目して—
- 第7章 現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力
- 第8章 自慰経験による女子学生の分化
- 第9章 性情報源として学校の果たす役割
—性知識の伝達という観点から—
- 付表Ⅰ 「青少年の性に関する調査」調査票
- 付表Ⅱ 基礎集計表(学校種別・男女別)



編／財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご予約・ご購入ができます!